

ヒョウソア

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
図書委員会
昭和61年10月21日

No. 60

福島高専 図書館報

◆ 巻頭言 ◆

笑う門には、福来たる

一般教科教官 芋川平

世をあげて「ヒョウキン者」が歓迎されている。茶の間においては勿論のこと、街頭においても、オフィスにおいても、一番の人気者は、ヒョウキンなTVタレントである。

彼等は、うっとうしい現実世界を、一時的にせよスッキリさせてくれる「気晴らし」役が、「清料飲料水」のようなものである。パスカルは、三百年以上も昔に言っている。“我々の悲惨を慰めてくれる唯一のものは、気晴らしである”《パンセ》と。

ところで、同じように我々を笑わせてくれるものでも、チャップリンの演じる映画「モダン・タイムス」の主人公は、どうだろう。そこには、世間の表街道からはじき出された者の持つ“哀れさ”と、それにも拘らず、したたかに生きて行こうとする人間の生命力が溢れ出ている。そして、その笑いが、巧まずして人間性を無視して合理化を進めようとする現代社会に対する痛烈な批判と、なっているのである。

さて、今日のTVタレントの笑いには、そのような辛味があるだろうか。彼等は、騒々しくブラウン管の中であばれ廻ってはいるが、そこには毒がなく、トゲがない。人畜無害という訳である。そして、若者が一様にそのような人畜無害の人気者になりたがっているのが、現代日本の姿ではないだろうか。五つや六つの幼児ならいざ知らず、二十才前後の若者が、今から人畜無害では救いようがないのである。若者には、荒野をめざすヴァイタリティがなくてはならない。たとえ、荒削りであり、未熟ではあっても。

そこで、再びパスカル先生の言葉—“人間は死、悲惨、無知をいやすことが出来なかったので、自己を幸福にするために、それらをあえて考えないように工夫した。……我々の悲惨を慰めてくれる唯一のものは、気晴らしである。とはいえ、それこそ我々の悲惨のうちで、最大の悲惨である。なぜなら、我々に自己自身のことを考えさせないようにさせ、我々を知らず知らずのうちに滅びにいたらせるものは、主としてそれであるからである。”《パンセ168節および171節》

さあ、最大の悲惨さに陥らないようにするためには、どうすべきか。答えは……自分で見つける以外には、ない。

(図書館長)

目

次

巻頭言	1	図書館利用状況一覧	12
随想	2	61年度夏休み利用状況	13
私の読書	5	新着図書目録	15

◎ 大人になったら読み返そう ◎

一般教科教育 阿 部 吉 弘

二十代には、すっかり読書から遠ざかっていましたが、娘に話をしろとせがまれて、昔の本をひっぱり出すハメになりました。手頃な短い話を聴かせていると、内心、アリヤーと思うことが度々あります。

その1、「人にはどれだけ土地がいるか」の場合、これは、だんだんと所有地を増やして来た働き者が、「1日の内に歩いただけの土地をやる」という悪魔の誘いに乗り、走り回ったあげく、心臓マヒで死んでしまう話です。子供心に「そんなに欲張るものではないという教訓だな」と感じたものです……阿呆やった。今読んで見れば、土地を所有するという行為への批判=墓の分しか土地はいらない、であることは明らか。もちろん、人間の欲望が加速度的に肥大していくことを、トルストイは良く描いていますが。

その2、「イワンの馬鹿」の一件。

この、有名な話を讀んだ吉弘少年の思うには、「一生けんめい働かなければいけないんだなあ。正直で、欲がないのが良い人間なんだなあ」

吉弘父さんの目にはこう映ります。「イワンの国は、トルストイの理想社会だ。1人1人が皆の為に生産する。人より豊かになろうと思わない。貨幣経済なんていやなものもないし、相手を傷つけるということも知らない。こういう社会は、おとぎ話だと皆考えるけれど、そう思い込んでいるだけではないか。唯一の可能性は、個人レベルでの変化、anarchy in the world. 康弘おじさんや、ロンじいさんは、大笑いするだろうな、きっと。」

少年と父親のギャップについての考察。

1. 少年は、世の中の事を知らない。
2. 少年は、観念を鍛えていないので、思考の広がりが無い。
3. 少年に対して、生まれてから押し付けられてきた、常識や道徳が支配的力を持っている。さて、高校に入学した少年は、「内面を豊かに」

という、例のスローガンの下、敢然と、頭の痛くなるような本に立ち向かい、二十才にして、くたびれて、前線から撤退して参りました。

確かに内面は豊かになって、さまざまな考え、問題があふれんばかりでした。意識構造がろくに広がらないままに、どんどん詰め込んだのですから、かなり苦痛でした。白色矮星の自壊です。

その後の十年間に、少年は父親になりましたが、次の事を悟りました。本当は、意識の世界はだだっぴろくて、何も無いのが良い。ただし、そこに何かが出現した時、即座に判断する能力が備わっていないければならない。その感覚を磨く為に本を読めば良かったのに、いつも、登場人物と同じレベルで悩んだり、作者の説を理解しようとしてばかりいたのだな。

本好きの人よ、気をつけなさい。作者をやたらと尊敬したり、お説ごもっともは危険です。作者が、どのような人間か、スパイするつもりで読みましょう。できたら、やっつけてしまおう。生意気な事ではない。人を批判することは、自分に刃を突き立てることです。自分の中に無い悪を、どうして理解できますか。

本嫌いの人よ、二十才前に本を読むのは、やっぱり大事ですよ。観念を鍛えないと、意識=宇宙は広がりません。一冊だけでも読んでくれるなら、「カラマー族の兄弟」を薦めます。3人の巨人に会えるし、道徳の下らなさもわかります。人間は偉大だ。

そして、大人になったら、童話や、子供向けの本を読みましょう。これらは、本当は、大人の為にあるのだと信じます。(頭が良ければ、本など読まなくても良い筈だが、そうもいかないのが普通だから。)

◎ 二つの短編小説を紹介 ◎

機械工学科教育 中山 淳 一

去る7月中旬、第95回芥川賞の選考結果が発表になったが、今回は該当作品はなしということだ

った。

前回の第94回では、米谷ふみ子氏の「過越しの祭」が受賞した。この作品を読んで、同じ芥川賞受賞作品である山本道子氏の「ベティさんの庭」を思い出した。

この二つの作品は、外国人と結婚した日本女性の結婚20年後の姿が描かれている。ここではこの二つの作品について紹介することにしよう。

「過越しの祭」は自由を求めてアメリカに渡った日本女性の物語である。彼女はユダヤ系アメリカ人と結婚し、20年の間に2児の母親となる。2児のうち、13才の次男は狂暴性の脳障害児で、彼女は苦勞の多い毎日を送っている。そんなある年の春、次男を施設に預けて、彼女の一家は、ニューヨークへの家族旅行に出かけた。次男の世話からも解放され、楽しい一時を過ごすべくやってきたニューヨークで、彼女等一家はこれまでも意地の悪い仕打ちをうけてきた義姉に招かれて、過越しの祭に出席することになった。

この過越しの祭とは、仏教の彼岸のようなもので、その昔、イスラエル人が奴隷から解放された喜びを祝う聖餐会なのだそうである。ユダヤ教徒でない女主人公は、そのことも含めて過去20年間、夫の一族からうけたうらみつらみをこの聖餐会を通して思い起こし、ついにいたたまれず、この会から抜け出してしまふ、という物語である。

障害児の次男、心臓病の夫、ユダヤ人社会の因習と葛藤など深刻切実な内容が、大阪弁をまじえたユーモラスな文体で語られ、しかも、ラストシーンが明るいことから読後感は意外とさわやかな印象を与える作品であった。

次に「ベティさんの庭」は、異国に嫁いだ日本の戦争花嫁の、結婚20年後の切々たる望郷の念を叙した作品である。

四国の片田舎生まれの柚子は、日本に駐留していたオーストラリア兵マイクとの結婚を決意して洗礼をうけ、エリザベスというクリスチャンネームをもらった。それでベティさんと呼ばれているのである。

彼女は周囲の反対を押し切ってマイクと結婚し、オーストラリアに渡って20年間、筆舌に尽しがたい苦勞の連続であった。いま、彼女はやさしい夫と母親思いの3人の息子達に囲まれ、一見幸せそうな生活を送っていた。

ところが、この街の港に日本の漁船が休養のために寄港しはじめ、ベティさんはそれら漁船の船長、機関長、水夫長といった船員達とつき合うようになり、望郷の念をかきたてられた。彼等を招

き、自分の庭でバーベキューパーティを開いて、賑やかにお喋りすることのなかに、心の安定と生き甲斐を見出したのであった。しかし、反面彼女は、船員達との交流に熱中することによって、マイクのアツが失われていくこともわかっていたのである。けれども、必死になって日本人との繋がりを求めている自分自身をどうすることもできないベティさんなのであった。

あら筋は以上の通りなのであるが、15年前にこの小説を読んだとき、私は胃の痛くなるような思いをした記憶がある。そして、今回は「過越しの祭」を読んで、ともに異郷の地に嫁いだ二人の日本人女性の二様の生き方に複雑な思いを抱いた。

この二つの作品とも短編小説であるから、読むのにあまり時間はとられないだろう。二人の主人公が懸命に生きている姿を是非みて欲しいと思うのである。

サイコロを振るものだ、人生は

工業化学科教育 内田修司

新潟という街を知っているだろうか。いわきからだと49号線を西へ西へと走るとある街で、人口約60万、案外大きな街である。友人も何人かいて、僕にとっては、いろいろな意味で大切な街の一つである。人々や安吾もこの街を故郷としている。白秋だったか日和山辺りを歩いて「海は荒海、向こうは佐渡よ…」という詩を書いたとか、(坂口安吾って知ってるかい?)

その新潟の街中に奥野カルタ店という店がある。お正月によくやるカルタのカルタ店である。その店のショーウィンドーの中に『サイコロを振るものである、人生は』と書かれて帖ってある。遊びの精神とは良く言うけれど、これはそういったものをひとまたぎした、示唆に富んだ生きていく上でためになるセリフであるように思う。

TBSブリタニカ「世界のゲーム」という本は、世界中のいろいろなゲームや遊びを写真で紹介していて、なかなか楽しい本である。この本の日本版の帯にマンガ家のはらたいら氏が書いている文章のタイトルは、「サイコロを振るのも、人生だ

よ」というものである。

奥野カルタ店の「サイコロを振るものである、人生は」と、はらたいら氏の「サイコロを振るのも人生だよ」というのは非常に良く似ているけれども、言っていることはだいぶ違う。この二つのセリフを見くらべてもらいたいものである。

遊びの精神とは、ブラブラ遊ぶことではなく、真剣に遊ぶことである。無邪気と清浄、狂気とパラノイアがそこにはある。そして、遊びを遊びという次元に留めるのではなく、人生即遊びにしてしまうのが、ホモ・ルーデンスのモットーというものだろう。

すなわち、「サイコロを振るのも人生だよ」ではなく「サイコロを振るものである、人生は」になるのである。

ところで、この「世界のゲーム」という本の「嵐」の項に、日本の伝統的な嵐も紹介されている。そして更に新潟の大型六角嵐も写真が載せられている。清酒富貴のテレビCFにも使われた。カラフルな、そして迫力充分な嵐合戦である。

この本は、日本語訳であって、もともとイギリスを始めとして世界各地で出版されているのだから六角嵐も大したものだ。ひもの一杯ついた大嵐が今や世界中の大人や子供たちの目にとまっている訳だ。あの本読む人の中には有名人、学者や俳優もいるだろう。田舎町に住む名もなき少年少女たち、摩天楼の下で嵐なんかあげたことのないニューヨークの子供たちもいるかもしれない。彼らはるか東洋のNipponのその中の、まるで未知の、新潟と呼ばれる典型的稲作地帯の、新潟県の中でも特に注目されることなどない、とある地域の、オラが街サのあの嵐合戦の存在を感知することになるわけだ。そして、あの大きな嵐が、フラフラと舞い上がる場所をそれぞれに思い描く。なんだかとてもインターナショナルな気分になって来てしまったなあ。

ところで、その六角嵐の写真なんだけど、絵の他に文字が書いてある。左肩のところに墨で黒々と、何と書いてあるかというとは、実は、「白根小」という文字という記号が、文部省の指導によって運営される白根市立白根小学校の略称であり、あの嵐が彼らのプロデュースによることを示すためのものであるなどは、およそ想像できないだろうなあと思うと、ちょっと愉快になるではないか。ガンバレ 白根小ノ

本を読む、読書するといっても、何も難しい本や全く興味のない本を読むことではないはず。おもしろそうな本を読めばいい、自分で探して。感

想文を書くために読書するなんていうのは、どこかおかしいものだから、本は、読みたい時に読めばいいと思う。

少年ジャンプは、毎週420万部を売り続け、コミック誌は、全盛期を迎えている。マンガを読むなどと言ってもムリな時代であり、マンガは悪いと単純に言い切れることは、この数字が許さない時代である。ただ、マンガしか読まないというのは、カッコ悪いと思う。ピシッとスーツを着て、YJなんて読んでる人やヌードやスカンダルだけが記事になっているような週刊誌をビール片手に列車の中で読んでいるおじさんを見ると、家ではどういう生活してるのかしらとか、どういう人なのか…といろいろ考えてしまう。マンガにもT.P.O.があるはずですけどマンガもいいけど。マンガだけというのも考えものだ。いい本を探して欲しいと思う。せめて、マンガも読むと言ってくれるといいなあ。本を読まなくても生きていけるけど、本は、心のビタミンCである。感性が大切にされる時代であり本物志向という流れがある時に、マンガだけにしがみついているのは、もう古いんじゃないかな。

※ 沢木耕太郎のこと ※

土木工学科教官 佐藤 恭輔

私が「ノンフィクション」に興味をもつようになったのは数年前、吉村昭著「戦艦武蔵」を読んで以来である。戦艦武蔵に関係した技術者像が実に生き生きとした存在感を持って描かれており、単なる事実の記録とは異なる想いがした。その後同じ著者による「高熱隧道」や柳田邦男著「零式戦闘機」等を読んだ時も同様の感想をもった。他に柳田邦男のもので「死角巨大事故の現場」も真迫力を感じ一気に読み切った本の一つである。これは日航ジャンボ機墜落、原発事故、地震災害等急速に巨大化する事故原因を検証し、安全システムの死角を衝いたものである。ノンフィクションは行き届いた調査資料をもとに事実を誠実に追求し読者の眼を通して、ドラマチックに仕上げられる「事実」の報道であり、内容も科学的で興味深いものが多い。

若きノンフィクション・ライター、沢木耕太郎

の場合は、事実や証人の不確かさを前提にして、あくまで自分の眼で見たものを出発点にする点でユニークである。私が最初に沢木耕太郎を読んだのは「さらばダイヤモンド」である。これは完璧なヒットを求め続け終身安打数、終身打率ともに長島茂雄の記録に匹敵するものを残しながら球界から忘れ去られた男、榎本喜八の話である。野球の好きな私には興味深かった。

その後「敗れざる者たち」でも、頂点に向けて登りつめようとしている人達への恋文のような人物論ではなく、インタビューも辛く憂鬱になるような盛りを過ぎた人達の話で、いわば敗北の美学に彩られたものである。最近「馬車は走る」と「深夜特急」の2冊の本を出した。前者は各界で活躍している6人の人物論である。その人達につき動かしているものは何だろうと問いかける。それは一個人を動かしているだけでなく、同時代のみんなを共通につき動かしているはずと見る。後者は著者の仕事の依頼が急激に増えはじめた26才から約1年間東南アジア、インド、中近東、ヨーロッパと上の上を辿る旅行をした時の放浪記である。旅行の先々で自分の精神のバランスをとろうとし

て頻繁に日記ではなく誰かに語りかける手紙とい形式の文章を書いたものをまとめたものである。異国を目的もなくほっつき歩いている若者の熱狂と退廃の危うい姿が随所に鮮明に現われている。この中で著者は今後のノンフィクションの方法論の確立を目ざして、20代台の総まとめをしているように思われる。

私は以前、いくら本を読んでもすぐ忘れてしまうので、本に傍線を引くことにしていた。昔読んだ本を久し振りでひらくと何より自分の変化に驚くことがある。

主観的には若いときとそれほど変わっていないような気である。肉体の変化と比べて、精神や感覚はそれほど年令の影響を受けていないことを知るのである。

特に感覚に属するような個所で感動する能力が消えていることを思い知る。時には、何故そこに傍線がひかれているか見当がつかなくなったり、「こんなつまらないことに感心していたか」と呆れる深刻化したところもあり、鈍化、老化したところもあるためであろう。沢木耕太郎を読んで、久し振りに若返ったようなつもりでいる。

私の読書

『トロッコ』を読んで

機械工学科1年 本多信二郎

今、この僕の文を読んでくれている方の中で、小さい頃、デパート等で、親とはぐれ、迷子になった方が一人はいらっしゃると思うが、この芥川龍之介のトロッコという小説は、そういう昔の小さい頃の事を思いだしてしまう小説である。

主人公の名は良平。どこにでもいそうな普通の少年である。この年代の子供というものは、何か一つ位は興味をそそる物がある。今ならばファミコンであろうが、彼が興味を示したものはトロッコであった。普通の荷物や土砂を運搬する普通のトロッコである。トロッコで土砂を運搬することが、彼の目には、とても面白いものに見えたのであった。そして良平は、トロッコに乗る土工になりたいと思う時があった。又、一度でいいから土工といっしょにトロッコへ乗りたいと思うこともあった。

ある日、彼は弟や隣の子供と一語にトロッコの置いてある村外れへ行った。だが、トロッコに乗って遊んでいた彼の前に現れた者は一人の土工であった。彼は良平達を怒鳴り付けた。その時から十日程後までは、良平は、人気がなくてもトロッコに乗ろうとはしなかった。

その後十日余りたってから、良平はたった一人でトロッコの来るのを眺めていた。そのトロッコを押していたのは、若い2人の男だった。良平はこの2人が、親しみやすく思えてきた。良平は彼らに聞いた。

「おじさん。押してやろうか？」彼らは良平が思った通りに快い返事をくれた。「おお、押してくよう」良平は彼らと一語にトロッコを押した。随分遠くまで来たであろう。彼らは良平に新聞紙に包んだ駄菓子くれた。又、彼らはトロッコを押した。坂を上りきった所で、若い土工達は良平にこう言った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」良平はあっけにとられた。だれにもたよ

れない。自力でここから家まで帰らなければならない。丁度、迷子になった時の様な気持ちであろう。良平は泣きそうになったが、泣いても仕方がないと思い、家まで走り続けた。やっとの思いで家に着いた時、良平は泣き出さずにはいれなかった。

良平は二十六年の年、妻子と一諸に東京へ出て来て、今はある雑誌社の2階に校正の朱筆を握っている。が彼は時々、何の理由もないのに、その時の彼を思い出すことがある。塵労に疲れた彼の前には薄暗い藪や坂路が細々と一筋断続している。彼らが乗ったトロッコは戻ってくる事ができた。だが、彼の歩んでいる人生は後戻りのできない一度きりの道だからであろう。

※『愛、深き淵より』を読んで

工業化学科1年 上遠野 智子

私はこの本を読んで、人間にとっての本当の幸せ、そして人生とは常に何かがあるのかわからないとても危険なものだということが何かわかったような気がします。

登山を愛し、器械体操を愛した星野さん。大学を出て体育教師となって2か月後のまさかと思われるような事故でした。肩から下がすべて麻痺し、手も足も全く動かないばかりか感覚さえもなくなってしまったのです。普段、何気なく自由に手足を使っている私達には、この闘病記録を読んで感動したとしても、この人の本当の苦しみというものはわかる事ができないだろうと思います。それに彼は四肢麻痺に加えて事故後しばらくは、呼吸困難など常に死が目前に迫っている状況だったのです。

思わぬ事故で深い淵に落ちてしまった彼。人生にはたくさんの淵があって、ちょっと足を滑らせただけでも深みに落ち込んでしまう時があると思います。そんな時、自分だけでなく大勢の人達の力がなくては淵からは上がれないでしょう。彼は四肢が麻痺しているということで確かに不幸ではありますが、あんなに大勢の温かい人達に囲まれているのがとてもうらやましく感じられました。特に彼の母親という人は、退院するまでの約9年間もつきそっていたのです。文字通り彼の手とな

り足となり、彼の苦しみも1番よく知っていただろうと思います。また彼女自身、変わり果てた息子の世話を繰り返す毎日がどんなにつらかっただろうと思います。

こんなにもたくさんの愛の中にいるのに、何故か人を許せなくなってしまいます。何年も寝たきりで自分の力で手足を動かせない人間ならこう思うのは当たり前でしょう。でも当たり前だと言いつでも嫉妬心を持っていたのでは、本当の幸せも見つけられず、人の不幸を探し出すことが楽しみとなってしまふでしょう。しかし彼は、自分の醜い心に気づき恥しいと思う事ができたのです。

そのうち、彼の全身の状態は落ち着いてきたのですが、四肢麻痺、機能回復の見込みは全くありませんでした。手足の自由を奪われたということは、これから先を生きていく自由を奪われたようなものだと思います。ただ生きているという苦しみを負ってしまった彼。そんなある日、彼は口に筆をくわえて字が書けることを知りました。彼の書く手紙は、受けとった人達に大きな喜びを与えました。また彼は詩を書き、花の絵を描きます。いくつかの作品が本書に載っているのですが、1つ1つの作品に感情がこもっているすばらしいものです。彼の詩、彼の絵は、彼の命そのものに感じられました。そして、その絵には彼の苦しみ、喜び、悲しみばかりでなく、お母さんの愛情も入っているのです。お母さんが、彼に指示されて苦勞して作った色が、彼の描いた花の上に塗られているのです。この絵を見て、人間とはたとえ手足の自由を奪われ赤ん坊のようになってしまっても、残された機能でたくさんの人々に深い感動を与えられる強いものなんだなと思いました。

手も足も自由に使うことのできる私達。この手足をどう目的で使うのか、またどうやってこの手で幸せをつかみ取るのかがとても大切であると思います。お金に何の不自由もなく楽に暮しができるのも、私達が欲しがっている幸せかもしれません。でもやっぱり健康であり、たくさんの愛の中で生きていられるということが、人間にとっての本当の幸せという気がします。

私は、深い淵に落ちないように、だからといって決して臆病にならないように、自由な手足を十分に使って生きていきたいと思っています。

※『棘まで美し』を読んで※

電気工学科2年 四 家 靖

この物語は恋愛小説である。この本を読んでからさらに恋愛とは何かについて悩んでしまった。まず画家が中心となってくる。年配でキャリアのある大野、若くて将来有望な竹谷、山根。竹谷と山根は自分の絵ができあがると大野のところへ持っていき批評してもらうという習慣になっていた。大野は竹谷と山根どちらもいいといていたが、他の画家は山根のほうをほめていた。そんなある日、大野の遠い親類の娘、吉村が上京するので大野のところへ住むようになった。まず竹谷が吉村をすきになってしまう。しかし吉村の気持ちは傾かない。吉村はそのとき山根を愛し始めていた。竹谷と山根の経済的事情はまだいっていなかったが、竹谷は貧乏で母と二人暮らし。山根は大金持ちの息子。全く対称的だった。やっぱり金があって洋服などをかってくれる男に女は魅かれるのかと感じた。吉村はたびたび山根のアトリエにいき、身の回りの世話をするようになつた。ところがあるとき山根と吉村はけんかをして別れてしまう。理由はよくわからないが、吉村は自殺してしまうのではないかと僕は思った。やがて気持ちも落ち着き吉村は大野のところへもどってくる。そして一生画家の仕事をしていきたいと大野にいう。竹谷も吉村が元気で安心した。大野のところへくる竹谷に吉村は画を教えるようになる。竹谷の吉村を愛する気持ちは今も変わっていない。吉村も竹谷に好感をもつようになる。やがて竹谷の画が大勢の人々に認められ、めでたく竹谷と吉村は結婚する。という話なのだが、僕はこの物語をよみある意味で安心した。人間のやさしさや思いやりは金で決まるもんじゃなく。結局吉村は表面的に山根を愛していたのだと思った。そしてその愛に敗れ、竹谷の真の愛に目覚めたのだと思う。恋の三角関係の難しさ、真の思いやり、愛について考えさせられる本である。

※高瀬舟、欲について※

上木工学科2年 猪 狩 忠 司

兄弟殺しの罪人、喜助は、京都から大阪へ回される高瀬舟の上で、今まで生きてきた上で最高の満足感にひたっていた。なぜかといえば、喜助兄弟は小さい時に両親を亡くし、苦しい生活を強いられていた。大人になった今でもそれはかわらず、給料を右から左へ人手に渡してなくしてしまうような生活をしてきた。それが弟を殺してしまつてろうやに入ってからは、仕事をしなくとも食べていける、おまけに遠島にされて行くのに二百文ももらえた。今までお金を自分のものとして持っていることのできるの、はじめてだ。という理由からである。

ここで問題なのは、喜助があまりにも欲がないということである。二百文といえば当時でも微々たるものである。そのお金に喜助は完全に満足している。はたして自分自身、今までの生活の中で、本当にもうこれ以上のものはほしくないと言えるぐらいまで満足したことが何度あるだろうか。

僕にはない。欲がなくなるということは、自分を高めようとしなくなるということではないかと思うからだ。これは大事なことである。もし世界中の人間が、自分を高める、向上心を持たなくなつたら、人類は、ホモ＝サピエンスではなくなってしまう。僕は自分を高めようと思わなくなったことはない。(ただ僕には努力が足りない)だから僕は完全なる満足を感じたことはない。

さて僕が言う欲と、森鷗外がこの小説で言っている欲とは、多少異なるものだと思う。精神的な欲と物質的な欲とのちがいである。

いわば喜助は物質的な欲について踏み止まっているのだ。作者もこのことについて喜助をたたえている。でもそれでは喜助はただの欲をなくした人になってしまうと思った。しかしちがう。喜助は「わたくしはこの二百文を島でする仕事の元手にしようと思っております」と言っている。つまり喜助は向上心に燃えているのだ。このことは、人の、いわゆる欲というものはなくなれないということを示しているのだと思う。

人は欲を持って向上する。しかし物質的な欲というものは、それなりにおさえなくてはいけない。考えれば考えるほど、みんなぜいたくなのだ。

※『気がつけば騎手の女房』 を読んで※

電気工学科3年 吉田幸夫

シンボリルドルフこの馬の名は別に競馬に興味のない人でも聞いたことがあるだろう。昭和59年に第51回日本ダービーを勝った馬である。もちろん史上四頭目の三冠馬である。中学の頃から競馬に興味を持ちはじめたのも、こんな名馬の影響があったからかもしれない。ここで断っておかなければならないのは、競馬に興味を持ったというのは、博打としての競馬ではなく馬を中心に置いた競馬である。話を進めると、私がシンボリルドルフを最初に見たのは、昭和59年の第51回の日本ダービーである。この日TVを見ていた私は、とてつもない馬の出現にTVの解説者の解説に合わせて非常に興奮していた。競馬でこんなに興奮したのは一年前日本の中央競馬会並びに競馬ファンは一頭の馬に大きな希望と願いをかけていた。その馬の名はミスターシービーこの馬はすでに4月の中山競馬場で行なわれた皐月賞、5月に東京競馬場で行なわれた日本ダービーに勝っていた。すなわち11月に京都競馬場で行なわれる菊花賞に勝てばトリプルクラウンすなわち三冠をたっせいするわけである。競馬にあまり興味のない人はびんとこないかもしれないが日本の競馬より百年以上の歴史のある英国競馬界でさえ三冠馬は、十五頭しかない。したがって日本の競馬ではわずかに二頭だけだった。昭和16年にセントライト、昭和39年にシンザンがそれぞれ三冠を取ってしまい20年近く日本競馬界には三冠馬が誕生しなかった。しかし20年ぶりにミスターシービーが三冠を達成しようとしていた。この時のミスターシービーの騎手は吉永正人という人だった。

このレースの結果は後に話すとして、この時TVでミスターシービーよりも吉永騎手を見ていた人がいた。私はその人が書いた本からいろいろな競馬の知識を得ることができた。その人は筆名が只野文代で本名は吉永みち子すなわち吉永騎手の奥さんである。私がミスターシービーを好きになったのも彼女の書いた本「気がつけば騎手の女房」<同名TV化>を見たからである。その本の中で筆者は自分と競馬との出会いや吉永騎手との出会いを書いている。筆者が競馬に出会ったのは、昭和43年で筆者が大学生の時だった。昼休みにTVで

ダービーをやっていたのを見たのだそうだ。その時は私はまだ生まれていなかったそのダービーのことはよくわからないが競馬との出会いがダービーというのは、私と同じなのでなにか本を読んでいても、他人事には思えなかった。しかし筆者はただの競馬ファンで終わらなかったのが私たちとは全くちがうところだった。当時日本の競馬記者で女はだれもいなかった。もっとも一般的にみても女が競馬記者になるなんていうのはちょっと変な気がする。しかし筆者は周りの反対を押し切り競馬記者になった。もちろん負けん気が強い筆者は男にもまけない仕事をした。このようなところに最近の女性の強さを見ることができのかもしれない。この時代に女性が社会に出てそれなりの地位につくのは大変だったと思う。なにせまだ現代のように他の女性の実績がないのだからその苦労は私たちが考えている以上のものがあったと思う。しかし筆者は本の中で「私がいこんな仕事を続けることが出来たのもみんな馬が好きだという気持ちがあったからだ」と言っている。たしかに私たちの日常生活でも好きなことに関することは少々苦しい仕事でもやっていける。だが反対にやりたくないと思っていることは必然的につかれてくる。私にすれば、勉強がいい例だと思ふ。やらなければならないと思ったり、にがて意識があるときは全然やる気がわかないしすぐに眠むたくなってくる。やはりあることにはがんばれるのは、そのことにたいして好きだという気持ちをもつことが大事なのであると思う。筆者も好きな仕事を夢中になって続けているうちに、本のタイトルどおりに「気がつけば騎手の女房」になっていた。そして何年後かには、自分の夫が乗る馬が三冠馬になろうとしていた。これも無中になって好きなことをがんばっていたために得ることができた幸せなんだと思う。がんばったから必ずむくわれるとは限らないだろうががんばらないよりはその可能性は高いと思う。しかし実際にはそのがんばれるものを見つけるのが大変なんだと思う。私は今3年生だからもし順調にいけばあと2年ちょっとで社会に出ることになる。その時に自分が好きなもののがんばれるようにしなければならぬと思う。

最後になるが昭和58年11月13日に行なわれた菊花賞でミスターシービーが三コーナー付近の坂を下って直線にさしかかったときにはもうその前を走る馬の姿はなくなっていた。

※『積木くずし』を読んで※

土木工学科3年 古川進一

これは本で読む前に、テレビ放送されたので、内容が何となく分かっていただけ、本を読んで、「よく十数年前の子供が生まれたころから日記のようなものを書いていたなあ」と感心した。こんなに細かく十数年も書くなんで、普通の家庭ではなかなか出来ないことだと思う。自分も毎日日記を書こうと思ったことはあるけれど、いろいろ急がしくて一ヶ月も続かなかった。だから、この両親は、とっても立派だと思う、しかし、日記をつけるこの両親は立派でも、一人娘だからといって、かわいがりすぎるのは、あまり好ましくないことだと思う。

一人娘だというと、とってもかわいいと思うのが親だけど、あんなに娘が変わったのも、親が優しすぎるからだと思う。自分の家には、何か悪い事をすると、とっても怖い親がいるので前は何か変わったことがしてみたいと思ったけれど、それは、思うだけの夢でしかなかった。しかし、これで良かったのだと思っている。しかし、年中、がみがみ言う親も問題だが……。以前は、もっと話の理解できる親だったらなと思っていたが、この親のように、子供の言うことを何でもきいてしまう親だったら、おそらく自分も悪い事をしていたかもしれないと思う時がある。何となくこの年ごろになると大人っぽいことや反抗的な事をしたくなる。だから、この娘の気持ちが分からないこともないがこんなに親をこまらせて気持ちが良いのかなと思ふ不思議な感じもする。いくら親に自分の気持ちが分かっても、こんな恐いことは自分には出来ないと思う。特にたばこを吸ったり、シンナーを吸ったりすることは体に良くないし、早死にするばかりなのに、どうしてそんなにやりたがるのかと思う。この前にも、18歳の男女5・6人が車の中でシンナーを吸っていたら全員死んでしまったという記事を読んだ。本当にばかな奴らだと思う。シンナーばかりではなく、たばこという毒のようなものは、家族の人とかみんなにも吸わせたくないと思う。

それにこの娘は、小さい頃から体が弱くて、年中、病気をしていたというのに、こんなことをしたらよけい体が弱くなって、しまいには死んでし

まうんじゃないかと思う。そうしたら、生涯、取り返しのつかないことになってしまう。たかが親への反抗心で自分の命を捨ててしまうなんて、ばからしくてやってられないと思う。つい最近までは、中学生の自殺が一時はやったが、なぜそんなに死に急がなければならないのかと思う。人生80歳と言われるこの世の中で、まだ十余年しか生きていないのに……。まだしたい事がたくさんあったと思う。自分も大人になり子供を持つようになった時のことを考えると、とっても不安に思うようになってきた。子供を育てるということは簡単そうでもとっても難しいということをつくづく考えさせられた。

※もっと『小説』を読もう!!※

工業化学科4年 四釜祥弘

「あなたは小説を読んだ事がありますか」と問われたら、NOと答える人はほとんどいないでしょう。それなら、次に「あなたにとって小説とはどんな物ですか」と問われた時、単に「娯楽です」と答える人、あるいはそう思っている人はどれ程いるでしょうか。私はかなり多いと思います。なぜならば、漫画と同じ読み方をしている人が大半を占めるからです。その事は、読書感想文を書かせてみれば一目瞭然。

漫画と同じ読み方をする人の文には、「私は……と思った」とか「……を読んで……だと感じた」とか、自分が思った事や感じた事しか書かれていません。それでは絵を見ているのと同じです。まさか絵を見て「これはどうしてこういう絵なんだろう」などと真剣に考える人など、そうはいないでしょう。

大体、漫画という物自体のほとんどが「娯楽」を目的として書かれていると言えます。それゆえに、読み手はそれを読めば楽しめるが、ただそれだけで、後には何も残らない場合が極めて多いのです。

漫画はそれでもいいとして、小説を読んでそんな風ならば、はっきり言って小説を読む意味がありません。加えて、大きな損をしています。その事について、この文を読んでいる方は、よく味わっ

て頂きたい。

大切なのは、文を読み、そしてそこから想像する事です。与えられた材料から、自分自身で、自分風のオリジナルを創造する事なのです。一冊の小説から様々な空想を思い浮かべ、そこからさらに自分風に組み立て直すといった具合に、想像をくり返す程、想像力は身につけていきます。ところがここで、それが何の役に立つのかと文句を言う人が出て来ます。しかしながら、この豊かな想像力こそが、人間としての「財産」のひとつに他ならないのです。

「ボキャブラリーの乏しい人は出世しない」と言う人が結構いますが、このボキャブラリー（日本語で「語彙」その個人が使う語の元になる物全体を集めたもの）こそ、本を読む事によって貯えられ、想像する事によって育まれていくのです。そして豊かな想像力は最低限以下の情報から物事を的確に捕え、多大なるボキャブラリーは物事を容易に再現又は伝達するための言葉を選び出します。さらにそれはその人の「能力」となりその人にとって何事にも替えられない財産となることでしょう。

この「情報を集積、整理する能力」は、頭を使う職業ならば、いずれについても役に立ちこそすれ妨害や邪魔になることはないでしょう。想像力と探究心、そして探求心の三本柱こそが、創造力の源となるのです。私達は学生の本分を全うすべく、よく学びよく遊び、そしてよく読む事を忘れずにいよう。本を読むのではなく、小説を読んでみよう。毛嫌いなどしないで、どんなものでもいいから、数多く読み、想像力旺盛な人間になろう。それが誰の為でもない自分の為なのですから。

※『恩讐の彼方に』を読んで※

土木工学科4年 愛川克己

私は、最近「青の洞門」という本を読んだ。そのとき、「了海はなんとしんぼう強い、立派な人だろう。」と思った。そして、私は今でも21年も頑張った了海の姿が心に浮かぶ。が、「恩讐の彼方に」というこの本を読んでもみると、「市九郎は立派だ。21年もよく頑張ったものだ。」とただ感心するだけではすまされない、何かがあるように思われた。

市九郎は、はじめから21年もつちをふるって仕

事を続けるような、そんな強い信念や、意志を持っていた人間だったのであろうか。お弓からの激しい教唆で、つい悪事を犯してしまったり、半白の老人、豪家の若夫婦と、多くの人を殺したり、むしろ人間の弱さを露出した人物だった。しかし、自分の犯した悪行の恐ろしさに逃げて行った寺の上人は、市九郎に「もっともっと価値のある生き方をせよ。」とさとし、その価値のある生き方とはどういう生き方を学ぶために、また、価値のある生き方をするために仏門に入った市九郎。我が身の重ねてきた恐しさは、いっそう市九郎の心をさいなみ、小さな善根から大きな善根へと決意を固めていく市九郎の姿。このような身でもって悪をつぐなうという姿を、めったに見られるものではないと思った。

当時は、「犯した罪は、死んでつぐなえ。」という考えだった。私は、死を考えるのがありがちな人の心だと思う。自分が死んで何になるのだろうか。死というものは、それですべてが済んでしまうことはないのである。生きて、そして成さなければならぬことがあるのである。

自分の犯した悪行から、ただ逃れるということだけでなく、昔の罪をつぐなおうとした市九郎。そして、罪をつぐなうことに見事に成功した市九郎。市九郎の半生は、死して終わるよりも、もっともっと苦しいが立派だった。

また、市九郎が悪のつぐないとして始め200余間にある絶壁をくりぬき、道を通じようという大事業が、市九郎の手によって成し遂げられたのも、昔、市九郎の仕えていた主人の息子、実之助のおかげもあったと思う。それは、もし実之助が石工たちの止めるのを聞かずに、「親のかたき討ち！」とばかりにその場で市九郎を殺してしまっていたならば、市九郎の大誓願は実現なかったからである。

はじめは、「早く親のかたき討ちを達するために。」という願いだけで、市九郎と一緒に岩盤を打ち砕く仕事をしていた実之助だったが、それも、市九郎と一緒につちをふるって生を共にしているうちに、あだ討ちに費やしてきた自分の生き方に、大きな動揺を覚えたのだと思う。「絶壁がくりぬかれ、一寸だけでも剝貫が通じたときは、あだを返す。」と約束し、それを待ちきれなくて、少しでも早く通じるようにと市九郎に手伝った実之助だったが、いざ絶壁がくりぬかれ、最後に本懐を遂げた市九郎が、貫通した洞くつの小さな穴から、とうとうとして流れる山国川を指したとき、いざりよって市九郎の手を握り、感激の涙にひたったのだから……。

江戸時代、封建社会を整えてゆく上で、キリスト教の教えは、大きな妨げとなった。そこで幕府では、キリスト教を禁止する命令を出した。ばかばかしい封建社会を整えてゆくために……。「あだ討ち」この言葉の裏に隠された討つもの、討たれものの苦しみ。そんな「かたき討ち」が、美德とされていた封建社会。このような「あだ討ち」という封建社会の道徳が、いかに非人間的な行為であったか。「あだ討ち」という意味のない、ばかげた争いが、昔、人々の間で行なわれていたのかと思うと、残念でならない。

また、時代こそ封建社会だが、市九郎も実之助も、その頃の美德とされていた「あだ討ち」とか「犯した罪は、死んでわびるのが最善の方法である。」というような道徳には従っていない。むしろ、そうした封建社会にがんじがらめにされながらも「正しく生きるためにはどうしたらよいか。」というようなことを考え、強く、正しく生きている。私は、昔は大部分の人が封建社会のとりこになっていたと思う。しかし、「市九郎や実之助のように封建社会の道徳に左右されない人間がもっとももっとたくさんいたら……。」とも思った。会社を乗っ取られた憎しみから、その子供までも憎んだりすることのある現代においても、きっと平和な生活ができると思う。この本を読んで見て、自分の人生を正しく生きることの尊さを、強く感じた。

※ 『The horizon of Trial』 を読んで ※

機械工学科5年 小池次雄

一人の日本人青年の話を書いて下さい。

去年の秋、スペインのバルセロナに行きました。そこには聖家族教会というのがあります。ガウディが構想した教会です。百五十年ぐらい前からつくって、完成するのにあと二、三世紀はかかるといわれているのですが、そこで八年間、石を刻んでいる日本人がいます。

僕はその人に会ったら聞きたいことがありました。創造という行為には必ず完結がある。完結がなければなんでやるんだ！ということになるではないですか。ところが彼は完結したとしても二、

三世紀もあとの創造に参加しています。彼にとっては未完に終わるしかないものの創造に、どういう折り合いをつけているのでしょうか。同じように創造に携わる小説家としてどうしても聞きたいと思っていました。

ところが彼の顔を見たら、何も聞けませんでした。若いのに実に落ち着いた物腰で、僕は圧倒されました。

穏やかな顔をしていました。折り合い云々を感じさせないくらい穏やかな顔をしていました。

石積みの壁が立っているような建物の前で、「僕、今、あそこを作っているんですよ。」と彼は言うだけで他には何も言わなかったんですよ。何も言わなかった。そして「スペインにいらっしやる間に、何か僕にできることがあったら言って下さい。」じつにいい顔をしていた。

完成しないもののために、八年間も石を刻んでいられるのでしょうか？完成した時だって石を刻んだ日本人のことなんて、誰も覚えてはいないでしょう。でも、やっている人間がいるわけです。それでもやれるということの凄味に僕はただただ心が震えました。

～本文より～

こんな風に本文をただずらずらと書くのは読書感想文では邪道であるということはおわかってはいるのですが……。この話を実際に手で書きとめて置きたいという思いが自分におこってしまいましたので……。

※ 追憶というもの——

『幽霊』 を読んで—— ※

工業化学科5年 黒木勝仁

「人はなぜ追憶を語るのだろうか。」で始まるこの作品は、「ぼく」の幼年期から青年期にかけての憶い出をもとに、このテーマの答えを教えてくれる。作者は「どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みのなかに姿を失うように見える。」と言っている。

太陽が西に傾き山のかげにかくれる頃、<夜>がもくもくと首をもたげ、地面を這いよってくる。

小学生の頃感じたあの夜の怖さ、何かが後ろからひたひたとついてくる気配を、僕はまだ覚えている。また、生を失ったものを包み込んでいる独特の雰囲気。あれは<死>がもたらすものなのである。「ぼく」の姉が死ぬ時に見せた美しい眼球を見て、「ぼく」は『きつと<死>はやさしいものなのにちがいない』と彼は思う。

路傍に咲いている名もわからぬ花。その花に羽を休めている蝶。その蝶が羽をゆっくり上下させる姿を、不思議そうにじっと見つめる少年。それらはすべて<自然>あるいは<生>というものにつつまれている。「少年は、幼年期に吸いとった貴重な収穫をそっと発酵させるための時期である。」と、作者は言う。

僕達が何かをしていて、ある時ふっと過去の記憶がよみがえってくるのがよくある。例えば、どこかへ旅行して行った所の風景を見たとき、何か非常ななつかしさがこみ上がってくる、など

はよく経験することだろう。それは<刻>の悪戯なのである。「我々の内奥においては<刻>は時計の針のように規則正しくすぎでゆくものではない。ときには非常にゆるやかに、ときには極めて速やかになり、あるいは逆流したりする。」

この作品を通し、どんな憶い出でも年とともに成熟し、年輪を増してゆくものだということがわかった。しかし、時間によって少しも影響を受けぬ埋もれた記憶というものもあってよいはずだ。僕達の心の奥には、時間がその場だけで循環している部分があるのだから。こうした埋もれたものが浮かび上がってきた時、自分というものを形成するのは、普段考えていたよりもずっと深く遠いものに根源があることに気付くのである。追憶というものは、時間をかけて発酵され、美しくなってゆくものなのである。つまり人が追憶を語るのは、それが美しいがためなのである。

図書館利用状況一覽 利用者統計

(1) 58~60年度3カ年学生利用状況

N D C 分類	利用冊数 年度	実 数			%		
		58	59	60	58	59	60
総 記		191	160	187	3.2	2.4	3.0
哲 学		317	373	277	5.3	5.5	4.5
歴 史・地 理		174	239	81	2.9	3.5	1.3
社 会 科 学		79	94	27	1.4	1.4	0.4
自 然 科 学		1,247	1,830	1,512	20.7	27.0	24.4
工 学・技 術		3,619	3,581	3,800	60.2	52.8	61.3
産 業		2	4	3	—	—	0.1
芸 術・体 育		32	46	62	0.5	0.7	1.0
語 学		55	119	70	0.9	1.8	1.1
文 学		296	335	181	4.9	4.9	2.9
合 計		6,012	6,781	6,200	100	100	100

(2) 60年度利用概況

開館日数	243日
総入館者	37,028人
1日平均	152人
1日帯出人員	19人
1日帯出冊数	25冊

(3) 利用人員(科・学年別)

学科	学年	1	2	3	4	5	計	%
機 械		228	244	323	471	424	1,690	35.3
電 気		212	189	698	246	361	1,706	35.6
化 学		67	158	280	288	108	901	18.8
土 木		102	66	151	108	63	490	10.3
合 計		609	657	1,452	1,113	956	4,787	
%		12.7	13.7	30.3	23.3	20.0		100

(4) 60年度学年別・分類別・利用冊数

分類 \ 学年	1		2		3		4		5		計	%
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%		
総記	83	12.2	42	5.0	18	0.9	14	1.0	30	2.3	187	3.0
哲学	253	37.2	8	1.0	5	0.3	8	0.6	3	0.2	277	4.5
歴史・地理	27	4.0	41	4.8	9	0.5	0	—	4	0.3	81	1.3
社会科学	3	0.4	3	0.4	5	0.3	4	0.3	12	0.9	27	0.4
自然科学	70	10.3	299	35.3	639	33.3	407	28.3	97	7.4	1,512	24.4
工学・技術	196	28.8	396	46.8	1,151	59.9	917	64.1	1,140	86.2	3,800	61.3
産業	2	0.3	1	0.1	0	—	0	—	0	—	3	0.1
芸術・体育	10	1.5	20	2.4	21	1.1	8	0.6	3	0.2	62	1.0
語学	6	0.9	16	1.8	12	0.6	31	2.2	5	0.4	70	1.1
文学	30	4.4	20	2.4	61	3.1	42	2.9	28	2.1	181	2.9
合計	680	100	846	100	1,921	100	1,431	100	1,322	100	6,200	100

61年度夏休み利用状況

(1) 帯出人員及び冊数

学科 \ 学年	人						冊数					
	1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計
機械	10	33	19	5	14	81	21	63	30	7	20	141
電気	13	13	14	9	13	62	22	22	30	15	27	116
化学	6	11	23	13	8	61	12	13	39	26	24	114
土木	1	1	5	2	8	17	1	2	9	4	18	34
計	30	58	61	29	43	221	56	100	108	52	89	405

(2) 分類別冊数

分類 \ 学年	1	2	3	4	5	計
総記	13		3	2		18
哲学	21				3	24
歴史・地理	3	17	2			22
社会科学	2		1			3
自然科学	10	22	20	31	17	100
工学・技術		51	74	16	61	202
産業						
芸術・体育						
語学		5	4	1	4	14
文学	7	5	4	2	4	22
合計	56	100	108	52	89	405

(3) 帯出者学年・科別

学年	科	分類 在籍人	総記	哲学	歴史	社会	自然	I・技	産業	芸・体	語学	文学	計
			0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
1	M	43	7	3	2	1	2					6	21
	E	42	3	12			7						22
	C	42	3	5	1	1	1					1	12
	土	42		1									1
	計	169	13	21	3	2	10					7	56
2	M	41			13		1	45			2	2	63
	E	41			3		9	5			2	3	22
	C	43			1		12						13
	土	44						1			1		2
	計	169			17		22	51			5	5	100
3	M	39	1					27				2	30
	E	40	2		1			24			2	1	30
	C	44			1		17	20			1		39
	土	35				1	3	3			1	1	9
	計	158	3		2	1	20	74			4	4	108
4	M	38	1				1	5					7
	E	42	1				6	7				1	15
	C	33					24				1	1	26
	土	36						4					4
	計	149	2				31	16			1	2	52
5	M	33						18			2		20
	E	37					3	21			1	2	27
	C	33					14	7			1	2	24
	土	39						15					18
	計	142					17	61			4	4	89
総計		787										405	

新 着 図 書 目 録

※印は図書館 他は各教官の研究室に
所在するものを分別受入順に記載

総 記

朝日新聞縮刷版 60-12月 61-1~6月 朝日新聞社
朝日新聞社 朝日新聞社
朝日新聞 1986 同 衆
福島民報縮刷版 60-12月 61-1~5 福島民報社
奥村 恒哉 東洋文庫452 八代集 1 平凡社
島田 勇雄 453 真文雑記 4 同 衆
井上 秀雄訳注 454 三国史記 3 同 衆
池田 修 455 アラビアンナイト14 同 衆
島田 勇雄他 456 和漢三才図会 3 同 衆
成木孝次郎 457 桃日本記 1 同 衆
島田 勇雄他 458 和漢三才図会 4 同 衆
長沢規矩也 長沢規矩也著作集 第五巻 汲古書院
日本写真新聞社 日本写真年鑑 昭和61年版 日本写真新聞社
福田 敏一 人間の知的遺産40 講談社
目塚 茂樹 " " 9 孟子 同 衆
竹越 三又 民友社思想文学叢書 4 竹越三又集 三一書房
中江 真介 中江兆民全集 別巻 岩波書店
文部省学術院国際局 学術誌誌総合目録 和文庫 丸善
栗原 圭介 新訳漢文大系35 孝経 明治書院
中江 兆民 中江兆民全集 5 岩波書店
" " 7 同 衆
" " 11 同 衆
" " 15 同 衆
" " 16 同 衆
" " 17 同 衆

哲 学

阿部 豊一 増訂中国禅宗史の研究 研文出版
田辺 保訳 バスカル著作集 1~7 教文館
黒田 日他 新岩波講座 哲学 2 経緯・書譜・認識 岩波書店
山田 勲他 4 世界と意味 同 衆
坂本 賢三他 5 自然とコスモス 同 衆
村上肇一郎他 6 物質生命人間 同 衆
坂本 賢三他 8 技術・美術・科学 同 衆
木田 元他 新岩波講座 哲学 9 身体感覚精神 同 衆
藤沢 会史他 10 行為他我自由 同 衆
坂部 恵他

12 文化のダイナミクス 同 衆
14 哲学の原型と発展 同 衆
15 哲学の展開 同 衆
芥藤 忍随他 日本基督教団出版
大鹿 一正他 宗教改革著作集 9 教文館
青野 太潮他 キリスト教人名辞典 アルノルトゲーレン 人 間 法政大学出版局
カルプマン 大森 荘蔵他 新岩波講座 哲学 11 社会と歴史 岩波書店
" " 13 経緯と創造 同 衆
坂口 昂吉他訳 アウグスティヌス著作集 8 教文館
小池 三郎他訳 " " 10 彰国社
松田 裕二他訳 " " 15 同 衆
相良 亨他 講座 日本思想 2 知性 東京大学出版会
" " 4 時間 同 衆
" " 5 美 同 衆
三宅 清 菊田豊満の古典学 第1 三宅清
" " 第2 同 衆
ブルドリヒツヴィングリ 宗教改革著作集 6 ツヴィングリとその周辺 Ⅱ 教文館
中村健二郎 新岩波講座 哲学 3 記号論理メタファー 岩波書店
阿合 華雄 宗教と科学の接点 同 衆
谷亀 利一他 日蓮と法華信仰 読売新聞社
中村 元 思想をどうとらえるか 東洋選書
歴 史
北根 豊他 明治ニュース事典第 7 巻 明治36年~40年 毎日コミュニケーションズ出版部
" " 第 8 巻 明治41年~45年 同 衆
大室 幹雄 西洲案内 岩波書店
堀 英哲編訳 精選中国地名辞典 凌雲出版
村林 正美 雁堂簿の年々記録下 三重県 郷土資料刊行会
平凡社地方資料センター 大阪府の地名 I・II 日本歴史地名大系 28 平凡社
西岡 義治 みちのくの宿場を歩く 新樹社
角川日本地名大辞典編さん委員会 角川日本地名大辞典 39 角川書店
ピータートラッドギル イギリス人の見たアメリカ文化 金星堂
村上 寛他 日本史資料叢書 東京書籍
角川日本地名大辞典編さん委員会 角川日本地名大辞典 47 角川書店
日本歴史地名大系 15 新潟県の地名 平凡社

社会科学

谷川 健一他 日本民俗文化大系 12 現代と民俗 小学館
日本教育年鑑刊行委員会 日本教育年鑑 86年版 日本教育新聞社
毎日新聞社編 教育書検定 毎日新聞社
河野英代子 さらば恋しみの性 高文研
法務大臣官房司法法制調査部職員監修 分冊 六法全書 ①~⑥ 新日本法規
教員養成基礎教員研究会 道徳教育の研究 教育出版
虎岩 正純 イギリスの中から 研究社
萩原 龍夫 民衆宗教史叢書 1 伊勢信仰 I 雄山閣出版
宮崎 英彦 " " 9 鬼子母神信仰 同 衆
高梨 健吉 英語の先生曾と今 日本図書ライブ
服部 孝彦 アメリカへ帰りたい 同 衆
酒井 忠雄 人間の教育を考える 歴史と教育 講談社
日本教育心理研究所 ソフトエデュケーション くもん出版
R・ビアド他 大学の教授学習法 三川大学出版部
ジャックAチャンパース他 コンピュータ利用の教室学習 東京同文書院
後藤 忠彦 学校におけるコンピュータの教育利用 日本教育新聞社
木田 宏 日本とドイツの総務教育 愛育出版
T・オシ・イ・J・セルフ 人工知能による学習革命 ホルト・サウンダース
ルース・K・ランダー コースウェアのつくり方 アスキー出版
宮田 登他 日本民俗文化大系 11 都市と田舎 小学館
谷川 健一他 " " 12 現代と民俗 同 衆
" " 1 風土と文化 同 衆
エドワード・T・ホール他 かくれた差異 メディアハウス出版会
矢野恒太記念会 日本国勢図会 1986年版 国勢社
下出 積興 民衆宗教史叢書 16 白山信仰 雄山閣
渡辺 希 近世日本社会と宗学 東京大学
村上 秀亮他 文明としてのイエ社会 中央公論社
木村 健 日本人の深層心理 創元社
仲村 博一他 講座 社会福祉 有斐閣
綱野 善彦他 日本民族文化大系 14 技術と民俗 (下) 小学館
西山 賢一 ブルーボックス 653 勝つためのゲーム理論 講談社
三隅不二 655 リーダーシップの科学 同 衆
京極 純一 日本人と政治 東京大学出版会

森 浩一他
日本民族文化大系14 技術と民俗(下)
小学館

自然 科学

浅田 誠一他
図解とフローチャートによる定量分析
技報堂
" " 定性分析 同 幸
" " " 同 幸

PETER・SYKES
有機反応機構 第5版 東京化学同人 幸
R・T・MORRISON
有機化学(上) 同 幸
" " (中) 同 幸
" " (下) 同 幸

伊達 宗行
ブルーバックス633物性物理の世界
講談社 幸

岩波 洋造
" " 637教室では教えない植物
の話 同 幸

柳田 友道
微生物科学2 成長・増殖・増殖阻害
学会出版センター

志田 正二
化学辞典 森北出版
LEONF・PHILLIPS
基礎量子化学 東京化学同人 幸
D・BETTERIDGE
機器分析化学の基礎 丸善 幸
大橋 仁志
溶液化学 裳華房 幸
鈴木 正己
原子分光分析法 共立出版
福馬 淳子
話しながら学ぶ化学英語 廣川書店
電気化学協会
電気化学便覧 丸善
建設省河川局編
雨量年表 第32回昭和59年 日本河川協会
伊里 正夫
岩波講座 情報科学23 岩波書店 幸
森 浩一
気まぐれ数学のすすめ 晋土社
中山 茂
市民のための科学論 社会評論社
平田 邦男
BASICによる物理 共立出版
" " " ドライラボ入門 同
冲山幸太郎他
まんが物理教室(上) 清水書院
" " (下) 同
浅藤 憲一他
詳解 物理学演習 上・下 同
浅沼 満
NとSの世界 東海大学出版会
コンドー
相対性理論の話 東京図書
石田 正次
パソコンBASIC静力学 東海大学出版会
和田 正信
物理の世界 培風館
浅辺 昂
極低温の世界-目に見える量子現象-
新日本新書
山伏 岩夫
生命現象の化学反応1 三共出版 幸
荒木 峰
環境科学辞典 東京化学同人 幸
ジェイムスE.ヒューイ
有機化学(上) 三共出版 幸
" " (下) 同 幸
生嶋 明
謎々物性科学のすすめ 培風館 幸

今井 弘
現代無機化学 同 幸
北野 康
地球環境の化学 裳華房 幸
鈴木 豊他
有機金属化合物を用いる合成反応(上)丸善 幸
三枝 武夫
" " (下)同 幸
ブライアン・マッカスカ
ブルーバックスB638 クォークをさがす
講談社 幸
山崎 正紀
台風-最もはげしい大気しょう乱-
東京堂出版
北野 康
水の科学 日本放送出版協会
津田 義介
有機分析-機器による定性定量-
産業図書
堀口 博
紫外分光図説編纂 三共出版
吉弘 芳郎他
化学分析のしかた考え方 オーム社
日本分析化学会北海道支部
増補新版分析化学実験 化学同人
高松 祥郎
有機合成化学実験書 廣川書店
青木幸一郎他
最新電気泳動法 同
日本分析化学会関東支部
高速液体クロマトグラフィーハンドブック
丸善
野崎 一
新しい有機合成の展望 化学同人 幸
行本 卓
岩波講座情報科学20信号処理とシステム制
御 岩波書店 幸
南雲 仁一
" " 24生体における情報処理 同 幸
中山 茂
現代天文学講座 別巻 天文学人名辞典
恒星社
福島民友新聞社
科学万博つくば'85 福島民友新聞社 幸
森谷 正一他
読とき化学入門 オーム社
H.ハーケン
シナジェティクスの基礎 東海大学出版会
砂原 善文
科学者のための研究発表のしかた
朝倉書店
高分子学会
高分子科学の基礎 東京化学同人 幸
" " 実験法 同
科学技術庁編
知識ベースシステム 大蔵省印刷局
吉田 邦夫
新しい化学の挑戦 共立出版
泉 邦彦
化学構造式は語る 講談社
小山 慶太
科学歳時記 丸善
田丸 謙二
表面の科学 学会出版センター
日本化学会編
超微粒子-科学と応用 同
国土地理院編纂
地形図集 日本地図センター
" " 地形図集100年の歩み 同
市川 行和
衝突する原子 丸善
ロバード・ジャストロウ
ブルーバックスB-646 だれが宇宙を創っ
たか 講談社 幸
石浜 淳美
" " B-649 セックス・サイエ
ンス 同 幸
久保木芳雄他
" " B-650 次世代タンパク質
同 幸
コラーゲン 同 幸

流れの可視化学会
流れのファンタジー 同 幸
武田 暁
基礎物理学演習25 素粒子 裳華房 幸
日本安楽死協会編
安楽死論集 第1集 人間の科学社
" " 第2集 同
" " 第3集 同
毛利 孝一
生と死の境 東書選書
日本数学会
岩波数学辞典 第3版 岩波書店
高分子学会編
目でみる高分子1・2 培風館
大本 孝介
ブルーバックス642 脳から心を読む
講談社 幸
金子 務
" " 643 思考実験とはなにか 同 幸
本匠 佑
" " 644 遺伝子が語る生命像 同 幸
中村 義作
" " 645 四次元の幾何学 同 幸
栗田 常雄
" " 656 いたずら科学実験書 同 幸
日本安楽死協会編纂
安楽死論集 4 人間の科学社
" " 5 同
" " 6 同
清水 忠雄
基礎の物理5 電磁波の物理 朝倉書店
近角 聡信
物理学演習4 強磁性体の物理(上) 裳華房
安達 宏司他
入門 電気磁気学 ムイスリ出版
W.Kuyk
Modular Functions of One variable I
Springer
W.Kuyk & J-P.Serre
" " 同
Séminaire de théorie de nombres
Université de Bordeaux
Rager Godement
Topologie algébrique et théorie des
feis cedux Hermdnn
W.Dittrich
Selected topics in Gauge theories
Springer
G.M.D'Ariano
Integrable Systems in Statistical Me-
chanics World Scientific
Schwarz
Superstrings Vol 1 同
" " Vol 2 同
Alastair I.M.Ral
Quantum Physics: illusion or reality?
Cambridge U.P
P.D-ligne
Modular Functions of one Variable II
Springer-Verlag
S hastry
Exactly Solvable Problems in Con-
densed Matter and Relativistic Field
Theory 同
Pierre Ramond
Field Theory Benjamin

工 学
岸 源也
回路基礎編 コロナ社 幸
須田 健二他
BASICによる電気電子 共立出版 幸
高柳健次郎
テレビ事始 有斐閣 幸
オーム社編
ハイテク読とき読本 オーム社 幸

フランシス・J・クディラ
技術委員会誌の基礎 朝日出版社
一ノ前 昇
図解センサ活用の実際 オーム社
磯部 俊夫
マイコンによるデータ通信 培風館
角田 秀夫
実験によるオペアンプ回路とその解析 東京電機大学出版局
山縣 啓他
環境汚染へのとりくみ—重金属の生物影響— 恒生社厚生閣
谷下 市松
大学演習 工業熱力学 裳華房
赤谷 政夫
土壌汚染の機構と解析 産業図書
藤田 修照
積算必携 経済調査会
高橋 彦治
土木技術者のための地質学 鹿島出版会
小栗富士雄
機械設計におけるタブーガイドブック 共立出版
川北 和明
機械要素設計 朝倉書店
足立 壽雄他
機械要素設計演習 朝倉書店
朝島 貞男他
大学課程機械設計学 オーム社
井澤 実
機械要素の設計解析 山海堂
阪山 克三他
大学課程機械要素設計 オーム社
岡田 政美
機械設計 学研社
和田 穂前
機械要素設計 実教出版
中野 善之他
現代マイコン機械制御 オーム社
樋口登志男他
CAD解説 実教出版
建設省河川局編
流量年表 第37回昭和59年 日本河川協会
岡田 実
航空電子装置 日刊工業新聞社
当麻 喜弘
スイッチング回路理論 コロナ社
安達 三郎他
電磁波工学演習 同 幸
文物省編集
学術用語集 電気工学編 電気学会 幸
山田 茂宏
最新OPアンプ規格表 '85 CQ出版社 幸
長嶋 芳行
最新A-D/D-A コンバータ規格表 同 幸
川合 敏雄
PADプログラミング 岩波書店
橋本 佳三
マシン語ソートサブルーチン集 ナフメ社
谷下 市松
工業熱力学基礎編 裳華房
ウェイン・アール・ムーア
超精密機械の基礎 国際工機社
トランジスタ技術編集部
センサイインターフェーシング (No.3) CQ出版
" " (No.4) 同
内藤 喜之
電気数学 I 森北出版
" " II 同
長谷川太郎他
電子工学の基礎 共立出版
池田 拓郎
圧電材料学の基礎 オーム社
日本測量調査技術協会編
すぐ役立つ測量現場必携 I 測量基礎編 鹿島出版会
" " II 測量共通編 2 工事共通編

同
3 道路橋梁編 同
同
4 鉄道トンネル 同
同
5 宅地区画整理 同
同
6 河川ダム編 同
同
7 海洋編 同
日本道路協会
道路用語辞典 丸善
矢島 光吉他
実用機械シリーズ ポンプ 産業図書
桜井 恵三他
パソコンを活用した機械要素設計 日刊工業新聞社
渡辺 花
機械設計概論 パワー社
関口 隆他
計測制御手作りシステム 日刊工業新聞社
雨宮 好文他
制御用マイコン入門 オーム社
電子機械制御入門 同
製図マニュアル精度編委員会
製図マニュアル精度編 日本規格協会
曾我 直弘
初級セラミックス学 アグネ
小野栄一郎
改訂応用熱力学 産業図書
山田 壽哉
エンジンからクルマへ 山海堂
倉林 俊雄他
工業熱力学 朝倉書店
斉藤 武他
蒸気原動機 同
五味 努
内燃機関 同
斉藤 孟 他
工業熱力学 共立出版
大谷 忠雄
マイコン制御入門 啓学出版
榎本 信助
材料強度要論 長野堂
三井 康巨
アクリルテクノロジーの工作 日本放送出版協会
須田 健二他
メカトロニクス入門 共立出版
東芝自動化推進グループ
川井 秀夫他
機械のエレクトロニクス I 実用基礎編 技術評論社
" " II 応用実用編 同
" " III 機械応用編 同
桜井 昭男
ターボ流体機械とティフェーザ 日刊工業新聞
伊藤 茂他
容積形圧縮機 産業図書
笠原 英司
例題演習水力学 同
下坂 寛
水力学演習 同
森 貞彦他
機械製図の考えやすめ方 工業調査会
近森 徳重
パッキンとシール 日本工業新聞
石井 市三
発明家のためのやさしい機械学 日刊工業新聞
木上 進
ロボットは何をもたらすか 同
志水 英二編
マイコンインターフェイスの作り方・使い方 同
機械工学試験問題研究会編
機械工学重要問題の考え方・解き方 東京電機大学出版

杉田 稔
機械技術者のエレクトロニクス100講 日刊工業新聞
コンピュータ
ドラフティング研究会編
機械技術者のための自動設計製図法 同
渡辺 昭復
設計実務に役立つ材料力学 同
大越 孝敬他
光ファイバ オーム社
光ファイバ通信入門 同
立川 巖
FETの使い方 CQ出版社
Howard M. Berlin
PLLの設計と実用回路 マイテック社
谷塚 欣司
PCモータの制御回路設計 CQ出版社
トランジスタ技術編集部
実用電子回路ハンドブック 5 同 幸
猪飼 因夫
インターフェース回路の設計 同 幸
藤生 良治他
抵抗コンデンサの使い方 同 幸
久保次次郎
トランジスタダイオードの使い方 同 幸
伊藤 弘
オプトデバイス応用ノウハウ 同 幸
磯田 修一
デジタル回路のシステム設計 同 幸
中野 正次
デジタル回路設計ノウハウ CQ出版社 幸
水原 邦保他
情報処理の関連知識 オーム社 幸
磯原 清
FORTRANプログラムの作成 同 幸
江村 潤朗
ソフトウェアの基礎知識 同 幸
河名 進他
ハードウェアの基礎知識 同 幸
田中 廣
PC-9801パソコンプログラミング500題 日刊工業新聞社 幸
河西 朝雄
PC-9801 98グラフィックス入門 技術評論社 幸
若松登志樹
乙御わかる機械語入門 新星出版社 幸
ロイ・D・マイヤーズ
マイクロコンピュータグラフィックス 啓学出版 幸
オーム社編
初めて情報処理技術者試験を受ける人のために オーム社 幸
小野 寛他
エレクトロニクスパワー小辞典 共立出版 幸
長嶋 芳行
A-D/D-A変換回路の設計 CQ出版社 幸
一杉 勝
C-MOS応用回路とトラブル対策 同 幸
小野 寛
電子回路学 電気学会 幸
中島 秀之
知識表現とProlog/KR 産業図書 幸
守川 梯
2 & 3次元グラフィックス・ソフトの基礎と応用 CQ出版社 幸
藤田 寛
はじめての"C" 技術評論社 幸
押野 崇芳
CP/Mによる乙御マクロアセンブラ入門 日刊工業新聞社 幸
マイク・ジェームス
BASICで学ぶ人工知能 啓学出版 幸
酒 一博他
第5世代コンピュータを創る 日本放送出版協会 幸
那野 比古
人工知能の衝撃 日本経済新聞社 幸
吉田 利信他
はじめてのLISP 技術評論社 幸
安部 憲広

Prologプログラミング入門 共立出版
岡野 光治 PCM通信システム 電子通信学会
" 渡島 基礎編 培風館
" " 応用編 同
堂山 昌男他 環境のデザイン 鹿島出版会
材料テクノロジー10材料のプロセス技術II 東京大学山版会
崎川範行 ブルーボックスB639 金の難学読本 講談社
片目 才夫 " B640 パソコン入門 同
川合 敏雄他 高度化プログラム開発ツールPADET/
BASIC 岩波書店
市川 芳邦他 PC-9801/E/F/m/U/VF/Vm
ユーティリティ・プログラム応用実例集改訂版 秀和システム
中澤 博人 鉄のメルヘン-金属学をきざいた人々- アグネ
尾野 芳郎 星野芳郎著作集3 技術史I 勁草書房
" " 4 " II 同
" " 5 " III 同
太平洋工業社編 制御用マイコン-初歩から応用まで- 日刊工業
" " " すぐに役立つ電子工作 同
木内 雄二 画像認識のはなし 同
相良 岩男 デジタルのはなし 同
関口 隆 計測制御手作りシステム 同
柳野 崇芳 PC-8801
BASIC+機械語プログラムの構造化手法入門 同
村田 裕 マイコンとセンサのインターフェイス技術 同
佐野 清人 機械技術者のためのセンサ技術入門 同
杉田 隆 マイコンによる機械制御技術 同
太平洋工業社編 機械に知力をつけるZ-80マイコンプログラミング実習 同
中山秀太郎 技術史入門 オーム社
内田 知二 エンジニアのための国家試験受験案内 同
湯山 俊夫 デジタルIC回路の設計 CQ出版
太平洋工業株式会社 機械に知力をつける制御用マイコン第2版 日刊工業
藤田 義明 工業英語の語法 研究社
矢野晴一郎 体験的マイコン入門 日刊工業
科学技術情報研究会 超発想の流体マシン 同
北川 一雄 制御用マイコンの実用化プログラミング 同
磯沢 泰 工学と技術の本質 第2版 養賢堂
丸山 益輝 科学技術論 丸西
甲藤 打郎 工学技術者のための熱力学 養賢堂
田中 廣 PC-8801周辺機器活用
プログラミング300題 日刊工業
電子通信学会 電子通信用語辞典 コロナ社

川島 将男 PCM通信システム 電子通信学会
柳山 保富他 改訂電子回路 コロナ社
リチャード・P・ドローバー 環境のデザイン 鹿島出版会
ロジャー・M・ダウンス他 環境の空間的イメージ 同
西沢 健 ストリート・ファニチュア 同
木村 利雄 エレベータ・エスカレータ・立体駐車場 学芸出版
中島 将光 基本電子回路 電気学会
斉藤 正男 半導体電子回路 同
昭和61年度電子通信学会総合全国大会論文集 電子通信学会
日本音響学会 日本音響学会昭和61年春季研究発表会講演論文集 日本音響学会
独創開発論 工業調査会
横河ヒューレットパカード BASIC3.0プログラム作成の技法 横河ヒューレット
BASIC3.0言語解説書 同
BASIC基礎コースBASIC4.0応用コース 同
古井 貞昭 デジタル音声処理 東海大学出版会
斉藤 正男他 デジタル回路の基礎 同
デジタル情報処理の基礎理論 同
電気学会 昭和61年電気学会全国大会論文集 電気学会出版会
萩原 国宏 新体系土木工学25 流体力学 技報堂
伊保内 賢他 身の回りの化学実用品ノート 工業調査会
佐藤 正人 境界要素解析 培風館
堂山 昌男他 材料テクノロジー13 セラミック材料 東京大学出版会
宮本 義博他 初歩のデジタル回路I 基礎からのデジタルIC 技術評論社
相原 隆文 " " 4Z-80 実用マイコン製作 同
機械製図の総合研究編集委員会 技能検定1・2級 機械製図の総合研究 同
前田 光男他 はじめての電子工作 同
永山 泰昭 PC-9801/PC-8801 3次元グラフィックス入門 日刊工業新聞社
宇宿 行忠 図解パソコン通信プロトコル入門 オーム社
尾 仰 リモートセンシング工学の基礎 森北出版
塚本 正文 マイコン測量計算法 現代理工学出版
片桐 宏他 図解ミニコンパソコンのためのUNIX入門 オーム社
伊東 貞基他 PC-9801 3Dスーパーグラフィクス 秀和システム
堀 弘昭他 マイコンロボットの設計と製作 オーム社
アスキー書籍編集部 PC-9801U/Vパーソナルユースのすべて アスキー出版局
新谷 真澄 フロッピーディスク活用ガイド 日本ソフトバンク
井澤 實

機械設計工学 理工学社
井上 智博 グラフィクス解析マニュアル(第3巻) 秀和システム
川村 清 N88-BASIC-86解析マニュアル(第1巻) 同
岡岡 清次他 アセンブラソフト開発環境拡充をめざして 8086ツールライブラリ 技術評論
山内 直 8086プログラミングデザイン 秀和システム
ディスクシステム解析マニュアル(第4巻) 同
鈴木 忠義他 土木工学大系30 観光レクリエーション計画 彰国社
土木工学大系編集委員会 " " 34 土構造 同
川本 兆万他 新体系土木工学20 岩盤力学 技報堂
澤井 廣之 " " 42 橋梁上部構造 同
新谷 洋二 " " 48 土木行政と関連制度 同
野澤 聖之他 必修TK85で学ぶマイコン制御とアセンブラ入門 技術評論社
定成 信哉 マイコンロボット製作入門 マイテック
ウ・インアルム-ア 超精密機械の基礎 国際工機K・K
建設省 昭和60年版 建設白書 大蔵省印刷局
中村 英夫 新体系土木工学50 国土調査 技報堂
宮井 芳夫 セメント・コンクリート用混和材料 技術書院
中井 裕 新版 砕石 同
日本機械学会 メカトロニクスシリーズメカトロニクス入門 技報堂出版
市川 芳邦他 PC-9801/E/F/m/U/VU/VF/Vm
ユーティリティプログラム実例集 秀和システム
南 茂夫編 科学計測のための波形データ処理 CQ出版
安藤 淳平他 無機工業化学 東京化学同人
有賀 浩 RUN/C 演習問題 150 ナフメ社
堂山 昌男他 材料テクノロジー14 高機能性ガラス 東京大学出版会
関幸 規 工業化学実験データの整理法 日刊工業新聞社
前原昭一郎 建設技術者のための技術論文の書き方 山海堂
蟹木久一郎他 有限要素法ハンドブックI基礎編 培風館
" " II応用編 同
樋口登志男他 CAD解説 その導入のために 実教出版
日本コンクリート協会 マスコンクリートのひびわれ制御指針 日本コンクリート協会
コンクリート工事の失敗例とその対策 同
コンクリート技術の要点'85 同
粉体工学学会 粉体物性図説 日本技術図書
中川 博次他 新体系土木工学23 移動床流の水利

K. Weissermel	工業有機化学	東京化学同人	コンクリートの試練	セメント協会	正電ノ電音アクチュエータ	倉北出版
ファイケミカルビジョン研究会	ファイケミカルの現状と将来	化学工業日報社	セメント協会	セメント技術年報	同	山崎 幸彦
島田 静雄他	新版 合成樹脂の理論と設計	山海堂	樋口 芳則他	コンクリート構造物の破壊事故は教える	日本コンクリート協会	山崎 弘郎
岡田 浩	コンクリートの耐久性	朝倉書店	日本コンクリート工学協会	コンクリート品質の早期判定指針	同	上野 大平
前原昭一郎	建設部門 技術士第1次試験合格への近道	山海堂	さびを防ぐ事典編集委員会	さびを防ぐ事典	化学調査会	佐藤 愛他
土屋 和夫	ブルーボックスB-648 ハードウェアのすずめ	講談社	Histon	有限要素プログラミング	丸善	堀田 正純
杉田 美昭	土木工事急所シリーズII 鉄筋工事の急所	近代図書	電験問題研究会	電研第2種合格20年マスタブック	電気学院	堀川 明
土木学会	コンクリート・ライブラリー-第58号施工指針(案)	土木学会	日本電子機械工業会	最新電子部品ハンドブック	電機新聞社	横井与次郎
坂 英世	エポキシ樹脂接着剤を用いる鉄筋コンクリートの設計	土木学会	電気工事士教育委員会	改訂新版 電気工事士教科書	日本電気協会	武部 幹
山口 昌哉	CESMMセスム土木工事標準検測方法	同	未松 安晴他	光ファイバー通信入門(改訂2版)	オーム社	中山 謙二
アスキー	青箱編集部 MS-DOS3・1ハンドブック	アスキー	大久保 忠	光ファイバーの実験と工作	日本放送出版協会	斎藤 正男
加川 幸雄	有限要素法の基礎と応用シリーズ9 振動音響工学	培風館	飯島 成男	絵ときトランジスタ回路	オーム社	田中 公男
世倉 正義	絵ときMS-DOS大研究	日本実業出版社	西村 昭義	センサー応用工作	日本放送出版協会	アスキー
石川甲子男	パーソナルコンピュータによる測量計算プログラム(第1巻)	山海堂	中島平太郎	スピーカー	同	水文時系列のコンピュータ解析
Neill Graham	初めて学ぶ人のための人工知能入門	啓学出版	相楽 明編	簡単な設計製作とその耐久力	青野堂	水文系の出力モデルの固定とパラメータの推定法研究
Stuart C. Shapiro	LISPによる人工知能の基礎技法	共立出版	A.T.ウエルベコウ	ブルーボックス 641 宇宙移民計画	講談社	パラメータの推定と同定研究
戸内 順一	PC-9801-E-F-M困った時に聞く本	技術評論	田中 輝彦	NEC PC-9800シリーズ ユーザーのためのMS-DOSビギナーズ・ガイド	CBS出版	昭和61年電気情報関連学会連立大会論文
宇佐美知弘他	困った時に聞く本II	同	技術開発室	PC-9800シリーズ:ユーティリティプログラム-MS-DOS-1 秀相システム	同	The Bipolar Digital Integrated Circuits Data Book
平野 洋郎他	情報ネットワークのおはなし	日本規格協会	林 晴比古	MS-DOS	同	Circuits Data Book
Y. ベイカー	マルチ・マイクロプロセッサシステム	啓学出版	西井謙二郎	dBASE II プログラミング技法	ナツメ社	Bernard G. Gab
鈴木 晋哉他	THE VM WORLD-PC-9801 VW のすべて	ラジオ技術社	貞綱 俊之他	日本語dBASE II徹底活用	啓学出版	BASIC Television and Video Systems
飯島 成男他	絵とき電気機器	オーム社	小谷 善行	知識指向言語 Prolog 人工知能プログラミングへの序曲	技術評論社	J.M. Hoddy
オーム社編	第2種情報処理受験技術本	同	岡崎 康治	応用 CP/M	アスキー出版	Energy and Variational Methods in Applied Mechanics
根岸 晴雄他	超音波技術	東京大学出版	三好 俊徳他	実習 CP/M	同	John Wiley & Sons, Inc
化学工学協会	化学工学辞典	丸善	伊藤 紀夫他	ローカルエリアネットワークの構築技術とその応用(増補版)	フジテクノシステム	Impact Dynamics
粉体工学会	粉体工学実務	日刊工業新聞	日野 幹雄他	水文流出解析	倉北出版	II・Reismann
化学工業日報社	新しい無機化学工業の方向I	化学工業日報社	南 茂夫編著	科学計測のための波形データ処理	CQ出版	Elasticity Theory and Applications
土木学会	新しい無機化学工業の方向II	同	逢見 善久	機械製図のプログラミング	理工学社	Proceedings Inter-noise 85 Vol.1
立井 芳夫	土木学会	土木学会	山田 茂宏	最新モノリシック OPアンプ規格表	CQ出版	Bundesanstalt für Arbeitsschutz
			村井 直夫	最新ハイブリッド OPアンプ規格表	同	Vol.2
			内野 研二	同	同	Proceedings of Noise-Con 85

産 業

日本土壤肥料学会編
植物と金属元素
培友社

芸術

秋岡 芳夫
ブルーボックス 636 竹とんぼからの発想
講談社

綿谷 雪池
武芸流派大書典増補改定版
東京コピー出版

山田次朗吉
日本剣道史 一橋利友会

国書版行会
武術新書 名著刊行会

川口 久雄
長恨歌絵巻 大修館社

安斎 利洋
パーソナルコンピュータグラフィックス
美術出版社

パドウィンター
リラックス ベースボールマガジン社

鈴木 正成
スポーツの栄養・食事学 同文書院

佐々木吉良
図解・スポーツルール大書典 東陽出版

等原 一男他
全書日本の古寺5石山寺と近江の古寺
生美社

大橋 俊雄他
17山端・山端の古寺 同

上門 平
土門拳全集6 文楽 小学館
10 ヒロシマ 同

小野 三嗣
運動の生体科学 朝倉書店

今野 道輝
栄養と運動と健康 同

V.M.ガチオルスキー
スポーツマンと体力
ベースボールマガジン社

阿部 正和他
運動療法 朝倉書店

スポーツレクリエーション施設総覧編集委員会
スポーツレクリエーション施設—その企画
と運営— 産業調査会

講道館古誌編集会
国土 第1,2,3,4,5,6巻 財団法人講道館

柔道 第1,2,3,4,5巻 同

大橋 義彦
ブルーボックス 654 サークスの科学
講談社

語学

KDD東京国際電話局スタッフ
国際電話のやさしい英会話 南雲堂

森田 鶴之他
スピードリーディング 荒竹出版

R.A.J. Maynard
ナチュラルイングリッシュ 大修館

東後 晴明
英語ひとすじの道 日本放送出版協会

小川 邦彦
ブラッシュアップ英会話 同

William Strunk Jr.
英語文章ルーツブック 荒竹出版

杉田 敏
英会話表現辞典 旺文社

安井 悦他
英文法の学習 開拓社

マイケル・スワン
実例 現代英語用法辞典 朝倉書店

山田 虎雄
英単語記憶辞典 開文社出版

吉田 正己他
基本ドイツ単語1200 朝日出版

広永貞三郎
英語略語辞典 研究社出版

他

時事英語辞典 同

田崎 浩忠
名詞と遊ぼう サイマル出版会

動詞と遊ぼう 同

トム・バーナム
英語辞学事典 研究社

高階 裕子他
ニッポンの英語村 三友社出版

藤原 与一他
表現類語辞典 東京堂出版

諸橋 徹次
大漢和辞典12 大修館

森田 鶴之他
スピードリーディング 荒竹出版

中野 道輝
ボディ・ランゲージ事典 大修館

森澤 三郎他
実用英語ハンドブック 同

成山 品久
英語冠詞用法辞典 同

川上 義昌
英語類語辞典 開拓社

リチャードメイナード
ナチュラルイングリッシュ 大修館

竹本 幸生
英語教師のパソコン エデュカ

コンピュータの見た現代英語 同

ヒアリングの行動科学 研究社

S.N.ウィリアムズ
英作文のプログラム学習 同

石川 敏男他
ビジネス英会話辞典 南雲堂

S.N.ウィリアムズ
英文パラグラフの論理 研究社

日本英語教育協会
2級 全開講集 日本英語教育協会
2級 実用英語教本 同

田川 直己他
英語教育研究ハンドブック 大修館書店

竹本 幸生
英語教師のパソコン EDUCA

日塚 茂樹他
漢和中辞典 角川書店

あらかわそうべい
外来語辞典 同

安井 悦
英文法総論 開拓社

小西 友七
英語基本動詞辞典 研究社

Wolfgang Michel
これからのドイツ語 福文学

四口 存男
関口新ドイツ語大講座 三修社

トミー・納松
英会話文例辞典 評論社

杉田 敏他
英会話質問帖 ジャパン・タイムズ

岡崎 正雄
和家版和英 朝日出版

田崎 浩忠
電話英語ハンドブック 大修館

市橋 敬三
日米口語表現辞典 研究社

諸橋 徹次
大漢和辞典 索引 大修館

Jen Axelsen
Dansk - engelsk ordog Gyldenal
Engelsk - dansk ordog 同

G.A. Miller
Communication Language and Meaning
BASICBOOKS, Inc

野上弥生子
野上弥生子全集 15~23
別巻1~3 岩波書店

文学

丸山 昇他
中国現代文学事典 東京堂出版

鈴木 鉄次
漢詩美文名書辞典 東京書籍

目加田 誠
目加田誠著作集第二巻 定本詩経訳注(上)
龍溪書舎

第三巻 定本詩経訳注(下) 同

第四巻 中国文学論考 同

第六巻 唐代詩史 同

寺田 道彦
寺田青 全集 6~12 岩波書店

大岡 信
万葉集 古典を讀む21 同

佐藤 保他
津持のこころ 悠久の詩情をたずねて
白雲閣

中村 宗彦
古代說話の解釈 明治書院

大沢 清雄他
泉野心平の世界 宝文館出版

郭 雅直
屈原 日中出版

上 運就他
李白 同

胡 光舟
西遊記入門 同

劉 開揚
杜甫 同

廖 仲安
陶淵明 同

奥野信太郎
奥野信太郎隨筆集 1 中庭の食事 論創社

2 居酒屋にて 同

3 女へんの話 同

4 故郷芳野 同

5 塚そべりの記 同

奥野信太郎
奥野信太郎隨筆集 6 東京暮色 同

幸田 露伴
五重塔 運命 ほるぷ出版

七田 敏
海潮音 同

貞日 徹石
百葉八葉アール 上中下 同

こゝろ 同

長塚 節
土 同

石川 啄木
一握の砂 呼子と口笛 同

森 闕外
阿部一揆 高瀬舟 同

斎藤 茂吉
赤光・あらたま 同

芥川龍之介
蜘蛛の糸・地獄変 同

佐藤 作夫
田園の憂鬱・胸懐詩集 同

石島 武郎
カインの来潮・小さき者へ 同

川端 康成
伊豆の踊子・浅草紅団 同

小林多喜二
蟹工船 同

尾崎 藤村
夜明け前 一二三四 同

三好 達治
測量船・御千里 同

伊藤 壱
生物祭・火の鳥 同

太宰 治
晩年・走れメロス 同

尾崎 一雄

嵯峨殿様・まほろしの記 坂口 安吾 風博士・夜長姫と耳男 水井 尚風 愚問答譚・すみだ川 堀 辰雄 風立ちぬ・栗穂子 中野 重治	同 亭 同 亭 同 亭 同 亭 同 亭	歌のわかれ・中野重治詩集 吉行淳之介 藤藤販売人・驟雨 大江健三郎 奇妙な仕事・死者の書り 安部 公房 他人の顔 犬養 廉	同 亭 同 亭 同 亭 同 亭 同 亭	和歌大辞典 土原 文明 芥藤茂吉短歌合評 上 " " " " 下 目加田 誠 目加田誠著作集 5巻 文心堂 龍溪書舎	明治学院 同 同 文心堂 龍溪書舎
---	---------------------------------	--	---------------------------------	--	-------------------------------

図書館関係今年度の顔触れ

図書館委員会(兼)視聴覚教育委員会

館長	芋川平一	一般教科
副館長	山崎 藪彦	電気工学科
委員	西山公紀	一般教科
"	佐藤 新太郎	機械工学科
"	大隈 信行	工業科学科
"	佐藤 恭輔	土木工学科
"	浜中 利三	庶務課長
"	加藤 勇	図書係長

図書係

係長	加藤 勇
係員	大谷 敦子
"	坂本 恭仁子

視聴覚機器担当者

機械工学科	渡辺 興仁
電気工学科	石田 俊一
工業化学科	芳賀 俊彦
土木工学科	馬目 孝男

学生図書委員会

学 科	機 械	電 気	化 学	土 木
1	本多信二郎	香野奈津恵	上遠野智子	中村 公保
2	草野 太栄	四家 靖 須藤 隆士	横田 郁	田村 整
3	堀江 恭史	田場川 義裕 渡部 光男	筈崎 雅充	古川 進一
4	箱崎 充丘	木幡 仁	四釜 祥弘	赤津 教子 長浜 ミホ
5	小池 次雄 吉田 安彦	藤沢 英樹	石井 慎二	石井 政宅